

更級への旅

151



さらしなや姨捨山に旅寝して
こよひの月を昔見しかな
昔、さらしなの地で夜を明かした
ことのある能因法師が、都かその辺
りで月を見ているときに、さらしな
での観月体験を感慨深く思い出して
詠んだ歌です。ひよっとしたら、菅
原孝標女はさらし
なについて、能因
法師から話を聞い
て、イメージを膨
らませたのではな
いか？ 菅原孝標
女にとつては自分
のおじさんを先生
と仰ぐ能因法師で
すから、菅原孝標
女と能因法師の二
人の間になんらか
の接点があっても

「信濃国に下りける人のもとに遣
わしける」とした上で
月影はあかず見るともさらしなの
山のふもとに長居すな君
(紀貫之作、拾遺集)
さらに「越後より上りけるに姨捨
山の麓に月あかりければ」とした
上で
これやこの月みるたびに思ひやる
姨捨山の麓なりけり
(橋為仲作、後拾遺集)

千年前の平安京であった「さらしな問答」

当地の名を全国に知らしめた「更級日記」。作者である菅原孝標女がどのような経緯でこの日記を書き、タイトルを決めたのか。「源氏物語」が京の都(平安京)で話題になっていた千年前、「さらしな」がなぜ都の高貴な人たちの関心になっていったのかも合わせ、その理由について、史料をもとに推測してみたいと思います。私の教えが廃れる時代が始まるという末法思想が影響しているということはシリーズ47などで書きましたので、今号では、その中で菅原孝標女が「さらしな」に関心を深めた理由に絞ります。

▽おじさんが先生
調べていて「なるほど、そうかもしれない」と思ったのが、菅原孝標女(1008~59?)と能因法師との関係です。能因法師は(988~1050?)は菅原孝標女より20歳年上ですが、ほぼ同時代を生きた人。中流階級の貴族の生まれでしたが、出家し、和歌の道を生涯、追究しました。

自分の足で東北地方をはじめ各地を歩き、地名が持つ想像換起力を世に紹介しました。現在の「歌枕」の地を示したさきがけで、江戸時代の俳人、松尾芭蕉に「奥の細道」の旅をさせる大きな影響を及ぼした人です。その能因法師は菅原孝標女のおじさん(母親の兄、藤原長能)を和歌の先生と仰ぐ人で、しかも、その能因法師は、当地にも旅をし、次の歌を作っているのです。

当地を訪れた更級日記作者の縁者

年を重ねて自分の晩年を案じていた菅原孝標女ですから、さらしな・姨捨に旅をした能因法師が縁者であるなら一層、「どんなところでしたか」と尋ねたくなつたのではないのでしょうか。能因も歌の先生の姪なのだからと、自分の観月体験やさらしな・姨捨の風景を語つたかもしれない。姨捨は今のようにならなくても、手軽に旅ができる時代ではありませ

紀貫之の歌は、信濃に任官する人に「信濃と言えはさらしな・姨捨の月が有名だが、そこの月が美しすぎるからといって、ずっといてはいけない。早く京の都に戻ってきてほしい」という気持ちを詠んだものでしょう。橋為仲の歌は、新潟からの帰りに見たさらしな月の美しさを感慨深く思い出したものです。こんな風に勅撰和歌集で紹介される「さらしな」です。訪ねたことがない人がさらしな・姨捨を盛り込んだ歌を作るためには、実際に訪ねた人にどんなところなのか聞き、自分なりにイメージを膨らませることが必要だったでしょう。

さらしな・姨捨には、自分の晩年をいやおうなく考えさせる響きがあります。そうやって、都の人々はさらしな・姨捨の世界が身にしみるようになり、「更級日記」も執筆され、また和歌にも詠み込む人が増え、伴つて月の美しさが強調される地名になった可能性がります。そして最初に大きな影響を与えた和歌が古今和歌集収載の「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」だったのです(この和歌についてはシリーズ30、60など参照)。

右の写真はかるたの「小倉百人一首」(任天堂)に描かれた能因法師とその歌。左上は天皇家に受け継がれてきた全勅撰和歌集を保管した蒔絵の箱です。その左上の写真は、菅原孝標女が詠んだ和歌「天のとを雲のながらもよそにみて昔の跡をこふる月かな」が選ばれた勅撰集の一つ「新勅撰集」(1235年)です。「勅撰和歌集入門」(有吉保著、勉誠出版)から複写させていただきました。

能因法師のことを調べ、さらしな・姨捨への関心が京の都で高まつていた理由についても想像を膨らませることができました。やはり「旅」と「和歌」の力が大きかったと思います。特に天皇の命令で編纂された勅撰和歌集です。最も権威のある和歌集ですから、そこに載っている歌は大きな話題になったはず。九〇五年



発行 二〇二一年十二月二十五日
編集 さらしな堂
(代表・大谷善邦)
〒三八九・〇八一三
長野県千曲市大字若宮一八四・六
(旧更級郡更級村)